

# 6つの質問から読み解く『高慢と偏見』

坂田 薫子

## はじめに

確かに『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813年)は作者ジェイン・オースティン(Jane Austen)が生きた18世紀後半から19世紀初頭のイングランドの社会背景を知らずとも、十分に楽しめる小説である。しかし、物語の中には、「なぜコリンズ氏はレディ・キャサリンに媚びへつらうのか」「なぜダーシーはウィッカムに任官辞令を買い与えたのか」など、21世紀の日本に暮らす私たち読者には一読しただけでは分かりにくい展開がちりばめられており、オースティンの意図を読み落としてしまう可能性も否定できない。筆者はこれまで拙著や拙論の中で何度か『高慢と偏見』に描かれた結婚観や階級の問題に触れる機会があったが、各論では別のテーマを解き明かすための証拠立てとして触れるにとどまっていた。そこで本論文では、新たな論点も加えながら、それらをここに一つにまとめ、『高慢と偏見』に登場する中心人物たちの出自や階級、職業、経済状況などを探ることで、『高慢と偏見』をより深く楽しむ方法を提案したい。なお、法律に関係する用語の日本語訳と解説は主に『英米法辞典』に従った。

## <問1> なぜベネット夫人は娘たちの結婚に躍起になっているのか？

それを読み解くためには、ベネット家の財産について詳しく考察してみる必要がある。最初は当主のベネット氏の財産について探ってみよう。

### 1.1. ベネット氏の財産について

まず、ベネット氏の現在の財産はいかほどなのだろうか。第1巻第7章によると、ベネット家の地所ロングボーン<sup>1)</sup>は年収2,000ポンドである。財産の計算方法は、男性なら彼の所有する不動産、動産を公債5パーセントで年収に換算し、女性なら彼女の持参金を公債5パーセントで年収に換算することができるので、ベネット氏の所有する地所の価値は4万ポンドであることが分かる。

ベネット氏の死後、妻子への遺産は「マリッジ・セトルメント (marriage settlement)」によって5,000ポンドと決まっている(第3巻第8章)。マリッジ・セトルメントとは「婚姻継承の財産設定」のことで、女相続人の財産を守る手段として用いられた契約である。資産家の父親は、娘の財産がだまし取られないように、娘の結婚に臨んで、娘の財産を信託制度によって他人に預け

ておくことで、彼女の夫となる男性に手が出せないようにしておき、娘本人がその収入を得るようにすることができた。概して、「持参金 (dowry)」の額に対して、「夫が活着ている間のお小遣い (pin money)」「未亡人になってからの手当 (jointure)」「子どもたちへの遺産 (portion)」を決めた。第1巻第19章にほのめかされているように、この5,000ポンドを仮に5人の娘で5等分すると、1人1,000ポンド、年収に換算すると50ポンドとなる。そのうちの4,000ポンドは、妻となったベネット夫人の持参金なので (第1巻第7章)、ベネット氏自身は1,000ポンドしか財産を出さないということになる。それ以上出せないということは、ベネット氏はそれしか貯めなかったということの意味する。

G・E・ミンゲイ (G. E. Mingay) は、18世紀後半、男性がジェントルマンと呼ばれ得る生活をするには少なくとも300ポンドから1,000ポンドの年収が必要であったと説明しているし (23, 26頁)、エドワード・コーブランド (Edward Copeland) も、18世紀末期、「年収500ポンドというのは、やっとな堵のため息がつける収入」(『お金について著す女性たち』(Women Writing about Money) 30頁) であったと述べていることから、5人の娘たちにレディと見なされるレベルの生活を送り続けて欲しいベネット夫人にとって、娘たちが1人年50ポンドで生活するという将来像は相当気の減入るものであったと考えられる。

## 1.2. ベネット氏の遺産相続について

ロングボーンは「男子限嗣不動産 (fee tail male)」で、息子のいないベネット氏は、結果として「生涯不動産権 (estate for life)」しか持てなかったことが推察される。不動産権について簡単に説明すると、「単純不動産権 (fee simple)」は相続性について制限がない。遺言で誰がどのようにして土地財産を相続するかを決定できる。他方、生涯不動産権しか持たない人物はその存命期間中、その不動産から出る収益は自分のものにできるが、その一部たりとも毀損したり、譲渡したりすることは許されない。手付かずのままその不動産を次の相続人に渡さなければならぬ。

法律で不動産の限定が認められるのは、不動産の処分をした人の孫が成人になるまでだったので (ダニエル・プール (Daniel Pool) 91頁)、ベネット氏は、次の法定相続人となる息子が生まれたら、息子が成人になったとき、相続方法を変えようと考えていた (第3巻第8章)。しかし、結果として息子が生まれなかったため、遠い親戚のコリンズ氏がロングボーンに対して、次の男子限嗣不動産権を持つことになっているのである。ロングボーンは年収2,000ポンドの地所であるから、ベネット氏が計画的に貯金や投資を行っていれば、娘たちの将来に十分な貯えができたかもしれないが、彼は息子が生まれることを見越して、そうした義務を怠ってしまう (第3巻第8章)。ここがベネット氏の最も無責任な点であることは否定できない。

## 1.3. ベネット夫人の結婚と階級について

以上のことを踏まえて、ベネット夫人の結婚観について考察してみよう。しかし、なぜベネット夫人は娘たちの結婚に躍起になっているのかという問いへの答えを見つけるには、先に、これから嫁ごうとしているシャーロット・ルーカスの結婚観について考察することが役に立つ。

### 1.3.1. シャーロット・ルーカスに見る未婚女性の立場

まず簡単にシャーロットの家族について触れておく。第1巻第5章によると、父サー・ウィリアム・ルーカスは「小さな商業の町」メリトンの元商人で、町長を経て、現在の階級は一代限りのナイト爵である。おそらく自分で命名したのであろうルーカス・ロッジに住んでいる。人数は不明だが、このあとの引用の中にもあるように、シャーロットの下には「妹たち」と「弟たち」がいるので（第2巻第16章にも「シャーロットよりも年下のミス・ルーカスたち」とある）、子沢山なようで、長女のシャーロットは現在27歳（第1巻第5章、第1巻第22章）、マライアはすぐ下の妹である。

それでは、18世紀後半から19世紀前半のイギリスを生きたシャーロット・ルーカスのような中産階級出身の未婚女性たちはいったいどのような立場に置かれていたのだろうか。拙著『脇役たちの言い分』の第1章で、『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811年)に登場するルーシー・スティールの生き方について解説する際に用いた説明を一部再掲しながら、シャーロットの結婚観を分析してみる。

18世紀後半から19世紀前半のイギリスは、営利主義社会が急速に発展し、仕事場は非人間的な競争の場と化していた。過酷な生存競争に心身共に疲れ果てていた男性たちは、家庭に心の安らぎを求めるようになる。ジェフリー・ウィークス (Jeffrey Weeks) の言葉を借りれば、家庭は言わば「混乱した世の中であって、キリスト教で言う安息の地 (人間的な避難所)」(27頁)として神聖化されるようになったのである。そして、この現世の天国である家庭をつかさどるべき存在が、妻であり、母親である女性と見なされるようになる。オースティンの時代より少しあとのヴィクトリア朝に流行することになる表現を用いれば、女性は「家庭の天使 (Angel in the House)」と神聖化されることになるのである。これによって、男性は外で働き、女性は家庭を守るという性差による役割分担が理想とされるようになる。

男女の役割分担が明確にされるにつれて、本来家庭にとどまるべき女性 (妻、娘) が外で働かねばならぬことは、一家の主である男性 (夫、父親) に十分な経済力がないことの証拠と見なされ、それは男の恥と考えられるようになる。妻を外で働かせることなく生計を立てられることが、男性がジェントルマンと見なされるための必須条件の一つとなり、中産階級の一員として成功していることの証となった。また、賃金を稼ぐ女性は労働者階級の一員と見なされ、中産階級から一つ階級を落としたとして軽蔑の対象となった。女性はレディでいるためには職に就いてはならなかったのである。そのため、中産階級以上に属している女性たちは外で働くことから尻込みし、家庭に閉じ込められている状態を甘受せざるを得なくなってしまった。つまり、家庭の神聖化は女性を家庭に閉じ込める結果となってしまったのである。

家庭を守るのが女性の生来の仕事となれば、女性に与えられるべき教育は、家庭の妻、母親となるために必要と見なされる程度の教養で十分と考えられるようになる。家庭にとどまり、外で働く必要がない以上、手に職をつけるための教育や、資格を取るための教育は女性には否定される。また、当時、職の門戸は女性には開かれていなかった。労働者階級の女性たちは別として、中産階級の女性たちに少しばかり職の門戸が開かれるようになったのは19世紀後半になってからのことである。それ以前、中産階級の女性たちが身分を落としたと見なされずに就ける職と考えられていたのはガバネスカレディーズ・コンパニオンだけであった (コーブランド 『お金につ

いて著す女性たち』、166～67頁)。

このように職の機会がほぼ閉ざされていたために、女性たちは生きていくためには結婚するという選択肢しか残っていなかった。結婚が女性の唯一の就職口となれば、結婚できずにいた女性は、社会における失敗作品として、まるで生き恥をさらしているかのように軽蔑の対象となってしまう。それにより、「オールドミス」にだけはなりたくないという強迫観念が女性たちの中に生じることになる。ヴィクトリア朝のフェミニスト、ジョセフィン・バトラー (Josephine Butler) が『女性の仕事と女性の文化』 (*Woman's Work and Woman's Culture*, 1869年) の「序章」で用いた表現を借用すれば、経済的必要性と「オールドミス」回避という強迫観念が重なって、女性たちは「誰でもいいから、プロポーズしてくれた人と結婚する」(xxxii頁) 心境にあった。まさにこの心境こそ、シャーロットにコリンズ氏の求婚を受け入れさせた原因である。自由に使えるお金もなく、すでに婚期を逃して久しく、不器量なシャーロットは、身分を落とさずに生きていく、言わば最後の手段として、夫選びに全神経を集中し、自分にプロポーズしてくれたコリンズ氏をためらいもなく受け入れたのだ。第1巻第22章にシャーロットの立場と心境の示された段落がある。

・・・ミス・ルーカスは結婚して身を固めたいという純粋で私欲のない一途な願いから彼のプロポーズを受け入れたので、結婚がいくら早くなっても構わなかった。

2人は早速サー・ウィリアムとレディ・ルーカスに同意を求めたが、2人ともとても喜んですぐに承諾してくれた。娘にはほとんど何も財産を残してやれないので、コリンズ氏の現在の暮らし向きを考慮すると、彼との結婚は願ってもいない良縁だったし、彼が将来お金持ちになる見込みは非常に高かった。[中略]一言でまとめてしまえば、ルーカス家はこのとき、当然のことながら、家中で躍り上がらんばかりに大喜びした。妹たちは予定より1、2年早く社交界デビューができる喜び、弟たちはシャーロット姉さんが一生独身のオールドミスになるのではないかとこの心配から逃れてホッとした。シャーロット本人はかなり冷静だった。彼女は目的を達成したので、このことについて改めて考える余裕ができた。彼女自身の感想は大体満足なものだった。コリンズ氏は確かに頭がいいとは言えないし、感じのいい男性でもない。一緒にいるとイライラするし、彼の自分への愛情もきつと思ひ込みに決まっていた。だが、それでもコリンズ氏は自分の夫になるのだった。——男性や結婚生活というものを高く評価していなかったが、結婚は常に彼女の目標だった。なぜなら、よい教育を受けていても財産のない若い女性にとって、結婚は人並みに生きるための唯一の生活手段であり、幸福になれるかどうかは定かではないとしても、飢えから免れるための最も好ましい予防薬に違いないからだ。この予防薬を自分は今、手に入れることができたのだ。すでに27歳であり、器量もよくないシャーロットはこの幸福をひとり噛みしめた。

この引用から分かるように、彼女はエリザベスほど「ロマンチスト」(第1巻第22章) ではないのである。

ただし、シャーロットは「誰でもいいから、プロポーズしてくれた人と結婚」した訳ではなさそう。サー・ウィリアム夫妻の考えるように、(このことは<問5>で詳しく論じるが、) コリ

ンズ氏はレディ・キャサリン・ド・バーグという得難いパトロンに気に入られ、「現在の暮らし向き」は申し分なく、ベネット氏が亡くなったあとに、年取2,000ポンドのロングボーンという地所を引き継ぎ、散財しない限り、「将来お金持ちになる」ことは保証されているので、恋だの愛だのにこだわらなければ、経済的には安泰な将来が約束されているコリンズ氏との結婚を、シャーロットは当初から虎視眈々と狙っていたに違いない。彼女が計算高いのは、友人エリザベスがダーシーと結婚するのならば、ダーシーの所有する牧師禄などに推薦してもらえるのではないかと考えを巡らせている点にも明らかである（第2巻第9章）。

しかし、彼女のドライな夫選びの先に待っているのは、ベネット夫人の結婚生活の繰り返しなのかもしれない。そこで、次に、拙著『脇役たちの言い分』の第2章で、夫婦としてのベネット夫妻について解説する際に用いた説明を再掲しながら、ベネット夫人にとっての結婚を考察してみる。

### 1.3.2. ベネット夫人に見る既婚女性の立場

ベネット夫人にとって、結婚とは女性に安定した将来を約束してくれるものであり、その点シャーロットとの共通点が多い。シャーロットは不器量なため、その知性でコリンズ氏の自尊心をうまい具合にくすぐり、妻の座という永久就職口を確保したが、ベネット夫人は自分より階級が上のベネット氏をその美貌と色香で虜にして（第2巻第19章）、結婚を果たした。ベネット夫人にとってもベネット氏は性愛の対象と言うよりもむしろ、自分（と生まれてくる子どもたち）が生きていくための経済力を体現する存在だったのではないか。そのことは、結婚に至るまでと新婚生活を送っているころはおそらくその性愛ゆえに懇懇に振舞い、彼女をちやほやしてくれていたと思われるベネット氏に、今ではからかいの対象にされ、常に自分の理解力をばかにされていることへの憤りよりも、彼の死後、ロングボーンが、つまりは財産がコリンズ氏に奪われてしまうことへの憤りや、夫が娘たちの結婚、つまり、娘たちが生きていくための経済力を保証してくれる制度のために何一つ努力をしてくれないことへの憤りの方がはるかに強いことから想像できる。

もちろん、当初から理解し合える望みなど持たず、その知性や性格に軽蔑の念を隠せないにもかかわらず、生活の安定を求め、言わばあきらめの境地でコリンズ氏との結婚を決意したシャーロットとは大いに異なり、ベネット夫人は自分よりも階級が上で、知性に溢れ、さらには自分に夢中になって求婚してくれたベネット氏に敬意や感謝の念を抱き、当初はロマンス小説のヒロインになったような高揚感を覚えていた可能性も否定できない。しかし、自分が年を取って色香を失っていくにつれ、夫が自分への興味を失い、それに伴って自分への思いやりをも失っていくことに、ベネット夫人が恨みを抱いているようには思われぬ。どうやら、不器量で大した持参金もなく、さらには年上（シャーロットは27歳で、コリンズ氏は25歳（第1巻第13章））という悪条件を備えていたシャーロットが、最初からあきらめの境地で結婚生活を始めたのと似て、ベネット夫人も、知性の面でも階級の面でも自分とベネット氏は対等な関係など築けないことを理解したうえで、ベネット氏との結婚生活に臨んだように思われる。

ではここで、ベネット夫人はなぜ娘たちの結婚に躍起になっているのかという当初の疑問に戻ろう。



### 1.3.3. なぜベネット夫人は娘たちの結婚に躍起になっているのか？

先に述べたように、当時はガバナースとレディーズ・コンパニオン以外、中産階級以上の女性が就いて恥ずかしくない職業はなく、女性の生きる道は結婚しかなかったと言っただけではなかった時代なので、ベネット夫人は、娘たちが、ベネット氏と自分が死んだあと、生活の面倒を見てくれる夫を見つけない限り、路頭に迷うことは避けられない現実である以上、自分が生きている間に何とかして娘たちの将来を確実なものにしてやりたい、と願っている。第1巻第7章において、天候の思わしくない中、長女ジェインを馬で送り出したり、第2巻第18章において、適切な保護者もつけずに誘惑の多い都会へ無分別な末娘リディアを送り出したりと、彼女の判断力には随分と問題があったとしても、その意図においては、母親としての思いに溢れていると言えないこともない。事実ジェインは、ベネット夫人の無教養な言動は恥ずかしいと感じているものの、母親の愛情に感謝している。ジェインはビングリーからプロポーズをされると、まずは母親に報告すべきと考え、「どんなことがあっても、愛情に満ちた母の気遣いを軽んじることはできないわ」（第3巻第13章）と発言している。このジェインの発言は、その品格のなさゆえ、お節介が空回りばかりするベネット夫人が、娘たちの将来のことを母親として心の底から案じていること、彼女なりのやり方で娘たちを愛していることが娘たち（の少なくとも1人）に（は）伝わっていることを示している。

### <問2> なぜベネット夫人の実家、親族は低く見られるのか？

この問いを解くために、まず、ベネット夫人の実家についてまとめてみる。第1巻第7章によると、ベネット夫人の実家はガーディナー家で、彼女の父親はコモン・ロー裁判所で当事者の代理人を務める下位弁護士「アトニー (attorney)」だったが、すでに他界している。彼女には姉妹（おそらく妹<sup>2)</sup>）が1人、兄弟（おそらく弟）が1人いる。弟のエドワード・ガーディナー氏はロンドンで商売を営んでおり、第2巻第19章によると、4人の子ども（8歳と6歳の娘2人と、それより年下の息子2人）に恵まれている。妹は先代のガーディナー氏の事務員（「実務修習生 (articled clerk)」）に位置し、言わば徒弟として5年勤めると、アトニーや、エクイティ関係の事件の手続きを担当する下位弁護士である「ソリシタ (solicitor)」となる資格を得た）だったフィリップス氏に嫁ぐが、フィリップス氏は現在、メリトン町にある義父の法律事務所を継いでアトニーとなっている（第1巻第8章）。フィリップス家はステイタス・シンボルのピアノを持っていない（第1巻第16章）ことからあまり裕福ではないことが分かる。

このように、ベネット夫人の親族である父親、そして兄弟姉妹は、ベネット氏のように、いわゆるジェントリー階級（土地を相続していくため、死去によって収入が終わるわけではない階級）に属してはおらず、のちに歴史家アラン・エヴェリット (Alan Everitt) によって「擬似ジェントリー (psuedo-gentry)」階級（死去に伴って収入が終わる階級）と命名された階級（デイヴィッド・スプリング (David Spring) 60頁）に属している。ステファニー・バーチェフスキー (Stephanie Barczewski) によると、本来「インデペンデンス（自活できるだけの財産）」というのは、農地の賃貸によって地所から得る収入で暮らしていくことだけでなく、投資から得る収入で暮らして

いくことを指してもよいはずなのだが、前者の方が後者よりも「威信が高い」(59頁)のものであったという<sup>3)</sup>。ベネット夫人の実家や親族が低く見られる一方で、ベネット氏の娘であるエリザベスがレディ・キャサリン・ド・バーグに向かって「私はジェントルマンの娘です」(第3巻第14章)と誇りを持って答えるのにも、こうした理由が存在している。

### <問3> キャロライン・ビングリーのベネット家への軽蔑は正当化できるのか？

ベネット夫人の実家であるガーディナー家が擬似ジェントリー階級だからと言って、キャロライン・ビングリーはあからさまに軽蔑心を抱いているが、果たして彼女はその態度を正当化できるのだろうか。それを探るために、ビングリー家の家系を考察してみよう。

#### 3.1. ビングリー家の地位

第1巻第4章によると、チャールズ・ビングリーの父親、故ビングリー氏は産業革命で栄えたイングランド北部の商業で富を蓄え、長男であるチャールズはそれを引き継ぎ、財産10万ポンド(年収5,000ポンド——実際、第1巻第1章に「年収4,000から5,000ポンド」と記されている)を保持している。ビングリー家の長女はルイーザ・ハースト夫人で、次女はキャロラインである。キャロラインについては、第1巻第9章に「彼より年下の姉妹 (his younger sister)」と描写されているので、彼女はチャールズの妹である。チャールズは「成人 (21歳) になってまだ2年経っていない」とあることから現在22歳と分かるので、キャロラインは21歳以下である。ハースト夫人については、第1巻第3章と第1巻第8章で、チャールズの姉妹のうちの「最年長 (eldest)」の方であるという描写しかないので、彼の姉か妹かは明らかではないが、ハースト夫人が21歳以下で、キャロラインがさらに年下であるようには思われないため、ハースト夫人はチャールズの姉ではないだろうか。姉妹の持参金は基本同じなので、ハースト夫人とキャロラインのそれぞれの持参金は2万ポンド(年収1,000ポンド)である。

ベネット氏は土地持ちのジェントリー階級なので、父親が商売で財をなした「成り上がり」のビングリー家より、現在の経済力はいざ知らず、階級面では上である。また、父親が、当時ジェントルマンと見なされるに相応しいと考えられていた4つの職業、陸軍、海軍、弁護士業、聖職(ジョハンナ・スミス (Johanna M. Smith) 73頁)の一つに就いていたベネット夫人も、商人であった先代のビングリー氏よりも地位が上なのだから、ハースト夫人とキャロラインがベネット家を見下す態度には本来根拠はない。第一、ダーシー家と比べれば小さいながらも、ベネット家はロングボーンという地所を持ち、テキストを読み込めば、ベネット家には「食堂支配人 (butler)<sup>4)</sup>」(第3巻第7章)、「男性家事使用人 (footman)」(第1巻第7章)、「家政婦 (housekeeper)」(第3巻第5章、第3巻第7章)、2人の「ハウスマイド (housemaid)」(第3巻第9章)、「料理人 (cook)」(第1巻第13章)がいることが明記され、さらに、「馬車 (carriage)」(第1巻第7章)を所有しているので「御者 (coachman)」が、「庭園 (park)」(第3巻第14章)があるので「庭師 (gardener)」がいることが推測でき、多くの召使いがいることが分かる。

ダーシーが、当初、自分はエリザベスに求婚することを決めておいて、ビングリーにはジェインに求婚することをやめさせようとした理由の一つは、おそらく、真のジェントリー階級の一員

の彼自身は格下の女性と結婚しても、その女性の地位を引き上げることはあっても、彼自身の地位が下がることはない一方で、成り上がりの擬似ジェントリー階級のビングリーでは、格下の女性と結婚すると、社会的に見て、彼の身分が下がってしまうとダーシーが考えていたからであったと思われる（特にテキスト内でのビングリーの地位が危ういのは、土地を所有していないことも一因となっている。物語の最後でペンバリーの近くに地所を持つことになり、ビングリーはやつと社会的上昇を確実なものにし始めることができたのである）。

### 3.2. ダーシーの地位

ここで、ビングリー家の地位の危うさとの比較の意味で、少し脱線して、ダーシー家とその親族について触れておきたい。フィッツウィリアム・ダーシーは28歳（第3巻第16章）で、物語の現在より5年前（第2巻第2章、第2巻第12章）に父親を亡くしたあと、地所ペンバリーの領主を務めている。彼の年収は1万ポンドなので（第1巻第3章、第1巻第16章）、ペンバリーの価値は20万ポンドであることが分かる。ダーシーには10歳以上年の離れた妹ジョージアナがいる（第2巻第12章）。彼女は15歳から16歳で（この物語はある年の11月から約1年間の出来事を描いているが、第2巻第12章によると、ジョージアナは物語の前年の夏に15歳で、物語の現在の8月の出来事が描かれている第3巻第2章で16歳になったと記されている）、3万ポンドの持参金（年収にすると1,500ポンド）がある（第2巻第12章）。ダーシー家はペンバリーという広大な領地を持ち、何代かにわたって当地の領主を務めているので、上流階級に属していることは間違いのない事実であるが、決して貴族階級ではない。貴族階級に属しているのは、ダーシーの母親の実家であるフィッツウィリアム家である。

物語の現在はすでに他界しているダーシーの母親は、フィッツウィリアム伯爵（第2巻第10章）（伯爵は、例外はあるものの、「Lord + 領地名」の「〇〇卿」で呼ばれるが、フィッツウィリアム伯爵は第2巻第7章で伏せ字で「××卿」と記されるだけで、その呼び名は明らかにされていない）の娘であるレディ・アン（伯爵夫人は「Lady + 領地名」で呼ばれるのに対し、伯爵の娘は「Lady + 名」で呼ばれる）である（第1巻第16章）。彼女の父親である先代のフィッツウィリアム伯爵には息子が（少なくとも）1人いる。それが現在のフィッツウィリアム伯爵で、その現在のフィッツウィリアム伯爵には（少なくとも）2人の息子がいる。ダーシーのいとことして登場するフィッツウィリアム大佐（30歳（第2巻第7章））は現在のフィッツウィリアム伯爵の次男である（第2巻第7章、第2巻第10章）。先代のフィッツウィリアム伯爵にはさらに（少なくとも）2人の娘がいる。その1人がダーシーの母親レディ・アンであり、もう1人がダーシーのおばレディ・キャサリンである。

レディ・キャサリンは地所ロウジングズ・パークの領主、故サー・ルイス・ド・バーグと結婚する。第3巻第14章でレディ・キャサリンは、ド・バーグ家とダーシー家のことを「爵位はない（untitled）が、世間に認められた（respectable）、高貴な（honourable）、由緒ある（ancient）家系だ」と言っている。「サー（Sir）」は准男爵かナイト爵であることを示すが、サー・ルイスは「サー」という称号を持っているにもかかわらず、「爵位がない」と言っているということは、ド・バーグ家はダーシー家同様、土地や資産や家柄がある、古くから続いてきた名家で、サー・ルイスの代になって、彼が何らかの功績を挙げて、一代限りのナイト爵を手に入れたことを示唆



しているのではないだろうか。ナイト爵夫人は「Lady + 姓」でよばれるが、レディ・キャサリンは伯爵家の娘であるため、結婚後も、そして夫の死後もレディ・キャサリンと呼ばれている。彼女にはダーシーのいとことなる、病弱な娘ミス・アン・ド・バーグ（ナイト爵の娘は「レディ」ではなく、「ミス」で呼ばれる）がいる。

当初ダーシーに高慢な態度を取らせていたのは、レディ・キャサリンの態度にも顕著な、このフィッツウィリアム伯爵家の誇りと自信だったようである。

#### <問4> キャロラインはなぜあのように鼻持ちならない階級差別意識をベネット夫人の弟のガーディナー氏に対して露わにするのか？

おそらくキャロラインは自分の階級の曖昧さからくる不安感と焦燥感から階級意識にとらわれているのだろう。そこで、ビングリー家とガーディナー家を比較してみよう。まずビングリー家についてであるが、キャロラインは、チャールズの財産が10万ポンドにのぼり、自分の資産（持参金）が2万ポンドであることを誇る。しかし前述のように、ビングリー家の財産は産業革命で栄えたイングランド北部の商業で蓄えた富なので、一家はド・バーグ家やダーシー家のように「高貴な (noble)」とか「由緒ある (ancient)」とは描写されずに、「世間に認められた (respectable)」(第1巻第4章)としか描写されていないのだろう。ロバート・マークリー (Robert Markley) は、ヨークシャー西部に羊毛で栄えたビングリーという名前の町があることがビングリー家の出自をうかがわせる設定になっていると述べ (91頁)、ビングリー家が製造業に携わっていた可能性を指摘している<sup>5)</sup>。先ほど紹介したパーチェフスキーの表現を借りれば、「土地なくして『インデペンデンス』はあり得ない」(123頁)以上、社会的上昇に重要なのは土地の購入で、先代のビングリー氏も地所の購入を目指していたが果たせず、息子チャールズにその夢を託す。しかしビングリー家は現在ネザーフィールドを借りているだけのテナントである。読者は最終章でビングリーが地所を購入したことを知らされるが、物語のほぼ全般でビングリー家の社会的地位はまだ危うい状態にある。こうした理由からキャロラインは自分の立ち位置に不安と焦燥を感じていると考えられる。そのため、ダーシーを巡るライバル意識も一助となって、彼女の階級意識はガーディナー家に向けられることになったのだろう。

他方、前述のとおり、先代のガーディナー氏は下位弁護士で、長女はベネット氏の妻となり、次女は父親の事務所の元事務員で、現在は下位弁護士となっているフィリップス氏の妻となる。長男であるガーディナー氏は現在ロンドンで商売を営み、商業地区のグレイスチャーチ・ストリートで「自分の商店の見えるところ」(第2巻第2章)に暮らしている。『ジェイン・オースティン研究の今』に掲載されている拙論「ハイベリーの階級闘争」でも触れたように、すでに財をなした商人は、商店と家と一緒にしたり、商店の隣や近くに住んだりせず、もっと流行の先端にある西側 (ウェスト・エンド) に住居を構えた (コーブランド 「注」 (“Explanatory Notes”), 473頁) というので、確かにガーディナー夫妻は上の階級の人びとから見ると軽蔑される生活をしているということになる。しかし、リディアが駆け落ちをした際、ベネット氏も、そしてガーディナー夫人に真相を知らされるまではエリザベスも、ガーディナー氏がリディアのためにウィッカム (の借金の返済と結婚の説得) に金銭を支払ったと思っていたので、ガーディナー氏が商売でかなり

の利益を上げていたことがうかがえる。少なくとも、ガーディナー家はベネット家よりもはるかに裕福なのだろう。

そのため、ビングリー家の姉妹（特に、父親を亡くしているうえ、結婚していないので、地位の不安定なキャロライン）はガーディナー家に脅威を感じている。キャロラインは、ビングリー家がかつて商売に関わっていたうえ、まだ「土地を所有しているジェントリー階級（landed gentry）」ではないことに不安を感じ、どうやら財政的にすでに同等の地位までのぼってきているように思われるガーディナー氏に脅威を感じているのかもしれない。彼女は必要以上にガーディナー家を低く見積もろうと、第1巻第8章では彼らがチープサイドの近隣に住んでいると誤った情報で悪口を言っている。古くからのロンドンの商業の中心地である点と、「チープ（安っぽい）」という響きから、あえてこの地名を選んでいるのだろう。

ただし、キャロラインは自分たちの世代はもう商売に関わっていないので、ロンドンで商売を営んでいるガーディナー家を見下しても当然と考えているのかもしれないが、もしマークリーが主張するように、ガーディナー家が住んでいるグレイスチャーチ・ストリート付近には当時東インド会社の倉庫があったので、ガーディナー氏は東インド会社に関連した取引に携わっているのだとしたら（90頁）、金融や貿易といった取引に比べ、生産に携わることの方が社会的に見て低いと考えられていた当時、かつて製造業に携わっていたと思われるビングリー家の娘が、現在商取引に携わっていると思われるガーディナー家を軽蔑の対象とするのは的外れな行為と考えられ、（階級差別が正当化できるかどうかは別として、）彼女が自らの行為を正当化することはかなり難しかったであろう。

拙論「ハイベリーの階級闘争」で論じたように、こうしたキャロラインの浅はかな態度とは対照的に、ガーディナー氏の態度はナレーターの視点からは好意的に描かれている。もしガーディナー氏が東インド会社に関係した取引に携わっているのなら、植民地貿易で財をなした多くの商人が「上流社会での地位に釣り合った年取をもたらせてくれる大きな地所を所有できるか否かで測られる『インデペンデンス』を得るために、十二分の財産を集めようと努力していた」（パーチェフスキー 23頁）当時、彼も地所の獲得に躍起になってもよさそうなものである。しかしガーディナー氏にはオースティンの他作品に登場する（元）商人たちとは異なり、田園に土地を買って、ジェントリー階級に成り上がろうと目論んでいる様子はない。もちろんこれは、ピーター・アール（Peter Earle）によると、不動産は投資に見合った利益を上げなかったため、ロンドンの商人が広大な地所を購入することに躍起になることはほとんどなかったというので（152～57頁）、ガーディナー氏は「エリート階級に上昇したことを見せびらかすため」（パーチェフスキー 35, 101頁）、「自分たちの住居を名所となる建物にしたがった」（パーチェフスキー 38頁）タイプの商人たちとは質を異にし、単に商売人として利潤の追求に専念していただけなのかもしれない<sup>6)</sup>。しかし、彼は商人としての自分の生き方に誇りを持ち、（少なくともテキスト内では）今後も商人として生きようとしている様子がうかがえ、そこがナレーター（そしてオースティン）から好意的に描かれている理由なのかもしれない。

## <問5> なぜコリンズ氏はレディ・キャサリンに媚びへつらうのか？

ウィリアム・コリンズ牧師は25歳で、ハンズフォードの「教会区牧師 (rector)」(第1巻第13章)である。彼は常にハンズフォードの広大な地所ロウジングズ・パークを所有する大地主レディ・キャサリン・ド・バーグに媚びへつらう。その理由を知るには、当時の牧師の在り方について理解する必要がある。まず、教会区牧師とはどのような立場の牧師なのであろうか。ジュリア・ブラウン (Julia Prewitt Brown) の説明を参照し、牧師の種類の一部を表にして示すと次のようになる。

牧師の種類

1年間の見習		deacon	執事
教会区を持つ 牧師	10分の1税を全額もらう	rector	教会区牧師
	10分の1税の一部をもらう	vicar	副牧師 (他人が所有する牧師禄を与えられた牧師、俗人の「教会領保持者 (impropriator)」に代わって牧師禄の管理にあたる牧師)
rectorの助手		curate	牧師補 (牧師禄の所有者を補佐する牧師)

オースティン (の小説) と牧師の関係を論じているアイリーン・コリンズ (Irene Collins) の研究書を参考に簡単にまとめると、牧師になるための「聖職叙任式 (ordination)」に出ることができるのは23歳からで<sup>7)</sup>、オクスフォード大学かケンブリッジ大学の学位を持っていることが望ましく、出身大学の推薦状が必要であった。式は「主教 (bishop)」が行った。牧師になったあと、運がよければ「牧師禄、聖職禄 (living, benefice)」を得ることができ、牧師禄を与えられた牧師は家屋と「10分の1税 (tithe)」からの収入を得ることができた。さらに牧師禄にプラスして「教会領地 (glebe)」(牧師館に付属する農地)があれば、そこからあがる収益も得ることができた。しかし、数が限られている牧師禄を手にするのできる牧師は必ずしも多くなかった<sup>8)</sup>。18世紀末、イングランドとウェールズに存在していた1万1,600の牧師禄のうち、2,500は主教と「大聖堂参事会員団体 (cathedral chapters)」が所有し、600はオクスフォード大学とケンブリッジ大学、そしてパブリックスクールが所有し、1,100程度は国王のものであり、5,500がランドオーナーの所有物であった<sup>9)</sup>。つまり、約半分は個人所有であり、牧師禄を得ることができるといえるかどうかはコネと「聖職推挙者 (patron)」による引き立てにかかっていたと言って過言ではなかったのである。そのため、牧師禄を得ることができた牧師はほぼ、ジェントリー階級出身の名門の出の者たちであり<sup>10)</sup>、聖職叙任式を終えた牧師たちの多くは牧師禄を得ることができず、彼らの多くは給料の安い「牧師補 (curate)」になる見込みしかなかった (ジェレミー・ブラック (Jeremy Black) 123~24頁)<sup>11)</sup>。そのうえ、牧師補職でさえ非常に得にくい状況にあった。

そうした厳しい競争の中、名門の出でもなく、お金もなく、コネもないのに、運よくレディ・キャサリンから教会区牧師として牧師禄 (と、第2巻第5章に“his two meadows”とあるので、教会領地までついていることがうかがえる) を与えられたコリンズ氏はたいそう恵まれていたことが分かる。それも、第1巻第15章によると、オクスフォード大学かケンブリッジ大学を卒業したコリンズ氏は、そこで名家の出の同窓生たちとともに学ぶ機会に恵まれていながら、「誰ひと

り役立つ知り合いを得られなかった」というので、レディ・キャサリンの寵愛を受けられるようになったのが大学時代のコネによるものではないことがはっきりしており、コリンズ氏が自分の幸運に驚喜したことは想像に難くない。さらに、将来牧師になる予定の親族がいて、その親族に住ませる予定があるのでない限り、牧師館の改修に積極的なパトロンが少なかったにもかかわらず、レディ・キャサリンはハンズフォード牧師館に適切な気配りをしているというのだから、コリンズ氏が自分の幸運を嘯みしめ、常に彼女に媚びへつらうのも当然と言えば当然なのだろう。

## <問6> ダーシーはなぜジョージ・ウィッカムに任官辞令を買い与えたのか？

それを読み解くために、ウィッカムとリディアの駆け落ち婚について触れるところから始めよう。

### 6. 1. リディアとウィッカムのマリッジ・セトルメント

1753年のハードウィック法により、21歳未満が結婚するには両親か後見人の同意が必要になる。これにより、ハードウィック法が適応されなかったスコットランドに駆け落ちをする、「グレットナ・グリーン婚 (Gretna Green marriage)」と呼ばれる駆け落ち婚が流行する。スコットランドでは、誰であろうと2人の立会人の前で誓いが立てられれば結婚と認められており、多くのカップルがイングランドとスコットランドの国境を越えた最初の町だったグレットナ・グリーンで式を挙げたのである。

ベネット家の5人姉妹の年齢は、ジェインが22歳（第2巻第16章に「あと少しで23歳」とある）、エリザベスが20歳（第2巻第6章に「まだ21歳（成人）になっていません」とある）、メアリが19歳（エリザベスが20歳でキティが18歳なので）、キティが18歳（第2巻第18章にリディアの2歳年上と記されている）、そしてリディアは15歳から16歳（ある年の11月設定である第1巻第9章での登場時と、その翌年の3月の設定である第2巻第6章では15歳と記されているが、5月の設定である第2巻第18章と駆け落ち時の第3巻第7章では16歳になっている）である。21歳未満のリディアが両親や後見人の同意なしに結婚するとしたら、このグレットナ・グリーン婚を行うことが手取り早かったはずだ。それゆえに、彼女自身が手紙で「グレットナ・グリーンに行きます」（第3巻第5章）と綴っていることもあって、リディアは当初ウィッカムとグレットナ・グリーンに駆け落ちしたと思われていたが、ダーシーの捜索で、結婚しないままロンドンに滞在していることが判明する。

その後、ダーシーの説得で、ウィッカムはリディアとの結婚に同意する。その際にリディア（実際は後見人としてのガーディナー氏や父親のベネット氏）とウィッカムの間にマリッジ・セトルメントが結ばれる。第3巻第10章によると、その内容は、リディアにはもともと決まっていた1,000ポンドの持参金以外に、さらに1,000ポンドを与えること、ウィッカムの1,000ポンドを超える借金（第3巻第6章）が帳消しになること（つまり、ダーシーが肩代わりすること）、そしてウィッカムのために（ダーシーが）陸軍正規軍の「士官 (officer)」の「任官辞令 (commission)」を購入することであった。では、この最後の項目の陸軍の任官辞令を買い与えることがなぜウィッカムの説得に貢献したのだろうか。



## 6.2. ウィッカムの地位

ここで、ウィッカムの経歴を詳しく考察すると、彼の父親は元は下位弁護士のアトニーで（第1巻第16章）、先代のダーシー氏が当主だったところにペンバリーの「執事（steward）」（第1巻第18章）を務めていたが<sup>12)</sup>、先代のダーシー氏が5年前に死去すると、そのすぐあとに死去している（第2巻第12章）。第2巻第12章によると、先代のダーシー氏はウィッカムに1,000ポンド、そして、牧師になりたいのならペンバリーの牧師禄を与えると遺言を遺す。しかし、ケンブリッジ大学に進学したウィッカムではあったが、彼が牧師ではなく、法律家になりたいと言うので、ダーシーは牧師禄の代わりに3,000ポンドを与える<sup>13)</sup>。ところが物語の現在よりも2年前、ペンバリーの牧師が亡くなった際、すでにもらったお金を使い果たしていたウィッカムは、自分は法律家に向いていないので、ペンバリーの次の牧師になりたいと言い出す。それをダーシーが断ると、ウィッカムはダーシーへの腹いせと、財産欲しさから、物語の前年の夏、持参金3万ポンドの、当時15歳のジョージアナを誘惑し、駆け落ち未遂を起こす。その後ダーシーの前から姿を消していたウィッカムは、「在郷軍（Militia）」（第3巻第8章）の「中尉（lieutenant）」（第1巻第15章）としてメリトン町に登場することになるのである。ちなみに、第2巻第12章によると、28歳のダーシーと「ほぼ同い年」とあるので、ウィッカムは26歳から27歳くらいではないかと思われる。

## 6.3. 在郷軍

上述のように、ウィッカムはメリトン町に登場した際は在郷軍の中尉であった。J・R・ウェスターン（J. R. Western）やイアン・ベケット（Ian F. W. Beckett）を参照しながら当時の在郷軍についてまとめると、在郷軍とは民間の防衛軍であり、各教区が割り当てられた人数分をくじ引きで選んだ男性たちで構成されていた。彼らは普段一般の仕事に就いており（そのため、くじ引きで選ばれた人びとは代理人を立て、自らは参加しないことが多かった）、3年間（1786年からは5年間）在郷軍に参加し、毎年28日間（1802年からは21日間）訓練を受け、原則として海外に派遣されることはなく、外国軍の侵略などの国の有事の際に招集され、その場合にのみ給料が支給された。

彼らを指揮する士官は、「州統監（lord lieutenant）」によって任命され、当初は土地を所有している、あるいは相続する予定である資産家でなければならないとされていたが、士官のなり手があまりにも少なかったせいで、資格の条件が徐々に緩められたり、無視されたりするようになり、その結果、「大尉（captain）」以上の高位の士官については、相応しいとは言い難い人物が任命されることがあった一方で、「下位士官（subaltern）」である中尉や「歩兵旗手（ensign）」に至っては、「破産したか、もともと財産を持っていなかった『困窮した怠惰な若者』」（ウェスターン 314頁）が任命されることがあり、彼らは在郷軍の「面汚し」（ウェスターン 314頁）でしかなかったとウェスターンは説明している。この説明は、自らの土地を持たず、常に借金まみれだったと思われるウィッカムが在郷軍の中尉になれた理由を教えてくれる。

事実、ウィッカムが在郷軍に入ったのは、有事の際に国を守ろうという高邁な精神からではない。第1巻第16章でウィッカムは

「実は僕が××州連隊に入る気になった主な理由は、ここにはいつも社交の場が、それも、良質な社交の場があるという期待があったからです」と彼は付け加えた。「××州連隊がとても立派な、気持ちのよい連隊だということは知っていましたし、それに、友人のデニーから今の兵舎の様子を聞いたり、メリトン町の人たちに大変親切にしてもらって、素晴らしい知り合いもたくさんできたという話を聞かされたりして、それでここに入ることにしたんです。正直に言いますが、僕には社交が必要なんです。〔中略〕仕事と社交が僕には絶対に必要なんです」(強調は原典によるもの)

と、自分が在郷軍に入隊した理由は「社交」であると恥ずかしげもなく公言している。実際、士官たちにとって在郷軍での生活は「運がよければ快適な休暇のようなもの」(ウェスターン 397頁)であったようで、ウェスターンは訪問先のあちこちで当地のジェントリー階級に舞踏会や正餐でもてなされた連隊の話をつくつも紹介している。スコット・マイヤリー (Scott Hughes Myerly) によると、軍人というのは貴族と同じように労働に携わらないため、民間人より上で、ジェントルマンであるという考え方が一般的だったというので (57頁)、陸軍正規軍と異なり、任官辞令を購入する必要のなかった (ジョン・ブレイハンとクライヴ・カプラン (John Breihan and Clive Caplan) 20頁) 在郷軍への入隊は、ウィッカムにとって大変魅力的に思われたのかもしれない。

#### 6. 4. 陸軍正規軍

しかし、赤い軍服に身を包み、さっそうとメリトン町に登場したウィッカムではあったが、有事の際だけ召集される在郷軍での任務は、いわゆる定職ではないので、中尉に任命されていたとは言え、ウィッカムは定職に就かず、安逸を求めて根無し草のように転々としているにすぎない。前述のように、当時ジェントルマンと見なされ得た職は牧師か法律家か軍人のみであったため (スミス 73頁)、牧師になるモラルもなく、法律家になる才能もなかったウィッカムに、ダーシーは言わば「最後通牒」として陸軍の任官辞令を買い与え、まっとうな人生を送るように要求することになる。ウィッカムは、リディアと結婚することを承諾し、ダーシーに任官辞令を買ってもらい、陸軍正規軍の歩兵旗手となって、北部の連隊に入ることを受け入れるのである (第3巻第8章)。

任官辞令は高額であったため<sup>14)</sup>、陸軍正規軍は裕福な家に生まれた次男以下の士官によって指揮されていたこともあって (プール 110頁)、陸軍正規軍に入ったウィッカムは、その時点からジェントルマンと見なされるようになり、新聞にリディアとの結婚の知らせが載った際は、「エスクワイヤー」と描写される (第3巻第11章)。ウィッカムはブライトンでこしらえた借金を肩代わりしてもらい、マリッジ・セトルメントでリディアには合計2,000ポンドが与えられたが、2,000ポンドが生む利子は年100ポンドにすぎず、また、陸軍正規軍の歩兵旗手の日当は5シリング3ペンスにすぎなかったというので (マイヤリー 197頁<sup>15)</sup>)、金遣いの荒いウィッカムがその程度の金銭的な条件で満足するとは思えない。おそらく、この地位の向上がダーシーによるウィッカムの説得に少なからず貢献したのだろう。

## おわりに

こうした考察から、オースティンがいかに自分の生きていた時代の社会背景を熟知しており、それを作品内にちりばめ、ストーリー展開と人物設定に反映させていたかが分かる。本論文では数ある疑問点の中から6つの質問を選び、それらへの回答を示すことにとどまったが、本論文の読者に新たな視点で『高慢と偏見』を再読する機会を与えることができたこととすれば幸いである。

## 注

- 1) ロングボーンは「村 (village)」(第1巻第7章)で、農業で成り立っている。ベネット家の邸宅は「ロングボーン・ハウス」(第1巻第16章)と呼ばれている。
- 2) 第2巻第2章にガーディナー夫人は「ベネット夫人とフィリップス夫人よりも何歳か若い」という記述があるので、記述順から言って、「ベネット夫人>フィリップス夫人>ガーディナー夫人」の年の順と思われる。
- 3) パーチェフスキーは土地よりも公債が生む利益の方が高いと分かっている。「公債で年5,000ポンド得るより、地所から3,000ポンド得る方がました」(59頁)と語ったインド総督代理の言葉を紹介している。
- 4) 小さな家では食堂支配人が本来「執事 (steward)」が担う男性召使いの筆頭を務めた。一般的には「バトラー」も執事と訳されるが、<問6>で説明するダーシー家の「スチュワード」と区別するため、ここでは食堂支配人という訳をあてる。
- 5) 他方ジョー・ベイカー (Jo Baker) が著した、ベネット家のハウスマイドのセーラ (第3巻第13章) を主人公にした『高慢と偏見』の派生作品『ロングボーン』(Longbourn, 2013年)では、ビングリー家が富を蓄えたのはリバプールかランカスターで、三角貿易による砂糖の商取引に携わっていた設定になっており、先代のビングリー氏の植民地のプランテーションの奴隷だった女性の混血の息子がネザーフィールドで男性家事使用人として働いている。
- 6) パーチェフスキーによると、例えば、東インド会社への投資は年5パーセントの配当だったのに対し、土地への投資は年3パーセントの配当しか得られなかった (101頁)。
- 7) A・ティンダル・ハート (A. Tindal Hart) によると、「執事 (deacon)」になれるのは23歳からで、教会区牧師になれるのは24歳からであった (22, 168頁)。また、W・M・ジェイコブ (W. M. Jacob) によると、大学での勉強は普通3年間であるが、卒業生が学士を取得してすぐに聖職叙任式に出ようとするのを防ぐため、あえて式に出られる年齢を23歳に設定していた (52頁)。
- 8) ピーター・ヴァージン (Peter Virgin) によると、1830年ごろ、牧師館のない教区が2,900存在しており (146~47頁)、ジョージ王朝後期、聖職叙任式に出た牧師のうち、55パーセントしか牧師禄を見つけられなかった (141頁)。
- 9) ヴァージンによると、1830年ごろ、「聖職推挙権 (advowson, patronage)」を持っていたのは、個人の「聖職推挙者 (patron)」が48パーセント、教会関係者が24パーセント、主教が12パーセント、国王が9パーセント、大学や学校などの団体が7パーセントであった (173頁)。
- 10) ヴァージンによると、ジョージ王朝後期、牧師の5分の1は生まれか婚姻関係により、ジェントリー階級と関係を持っていた (139頁)。
- 11) ヴァージンによると、ジョージ王朝後期、牧師の5分の1は生涯牧師補で終わった (140~41頁)。
- 12) ベネット家の男性召使いの筆頭は食堂支配人なのに対し、ダーシー家では執事である点が、両家の規模の違いを物語る。また、「スチュワード」は法律用語としても用いられ、「財産管理人」とも訳されるので、元アトニーの故ウィッカム氏がその任に就いたのだろう。
- 13) ヴァージンによると、聖職推挙権は牧師禄の年取の5倍から7倍で売れたという (181頁)。『分別と多感』で、デラフォードの年取200ポンドの牧師禄をブランドン大佐がエドワード・フェラーズに与えると聞いて、ジョン・ダッシュウッドは、次の「聖職任命権 (presentation)」を売れば1,400ポンドになるのに、何でもったいないことをするのかとあきれることから (第3巻第5章)、それにならって7倍で計算し、もしもダーシーが、ペンバリーの聖職推挙権を売った場合と同じ額をウィッカム

- に提示したとすると、ペンバリーの牧師禄はおおざっぱに見積もって年400ポンドの価値があるのかもしれない。現金3,000ポンドが生み出す利子は年150ポンドなので、ウィッカムは実際にペンバリーの牧師禄を手に入れた場合と比較すると、年250ポンド程度損をすることになる。しかし、10分の1税は天候に左右されるうえ、都会での社交を好む彼は田園での教区民、それも自分の地元の住民との交流に辛抱できないことが明白だったので、手っ取り早く大金を手にする方を選択したのだろう。
- 14) ウィッカムが就いた位は歩兵隊のうち最も下の位の士官であったが、ロイ・ポーター (Roy Porter) によると、18世紀中葉、歩兵旗手の任官辞令の購入でも400ポンドが必要であった (136頁)。ちなみにブレイハンとカプランは、あと150ポンドほど出せば、次の位である中尉のポストが買えたのに、さすがにダーシーはそこまでしてやる気はなかったのだろうと述べているが (23頁)、最終章となる第3巻第19章に、ダーシーはウィッカムをペンバリーには来させなかったが、軍人職での支援は続けたと記されているので、より高位の任官辞令の購入の手助けはしてやったのではないだろうか。
- 15) マイヤリーによると、兵士の給料は1797年に定められ、19世紀を通して同額のままであったという (2頁)。

## 引用文献

- Austen, Jane. *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*. 9 vols. Ed. Janet Todd et al. Cambridge UP, 2005-2008.
- Baker, Jo. *Longbourn: The Servants' Story*. Vintage Books, 2013.
- Barczewski, Stephanie. *Country houses and the British Empire, 1700-1930*. Manchester UP, 2014.
- Beckett, Ian F. W. "The Amateur Military Tradition." *The Oxford History of the British Army*. Ed. David G. Chandler and Ian Beckett. 1994. Oxford UP, 2003. 385-398.
- . *The Amateur Military Tradition 1558-1945*. Manchester UP, 1991.
- Black, Jeremy. *England in the Age of Austen*. Indiana UP, 2021.
- Breihan, John, and Clive Caplan. "Jane Austen and the Militia." *Persuasions* 14 (1992): 16-26. *Jane Austen Society of America*. <https://jasna.org/publications-2/persuasions/no14/breihan-caplan/>.
- Brown, Julia Prewitt. *A Reader's Guide to the Nineteenth-Century English Novel*. Macmillan, 1985.
- Butler, Josephine. "Introduction." *Woman's Work and Woman's Culture: A Series of Essays*. Ed. Josephine Butler. Macmillan, 1869. vii-lxiv. Cambridge UP, 2010.
- Collins, Irene. *Jane Austen and the Clergy*. The Hambledon P, 1994.
- Copeland, Edward. "Explanatory Notes." *Sense and Sensibility*. By Jane Austen. Ed. Edward Copeland. Cambridge UP, 2006. 435-500.
- . *Women Writing about Money: Women's Fiction in England, 1790-1820*. 1995. Cambridge UP, 1998.
- Earle, Peter. *The Making of the English Middle Class: Business, Society and Family Life in London 1660-1730*. U of California P, 1989.
- Hart, A. Tindal. *The Curate's Lot: The Story of the Unbeneficed English Clergy*. John Baker, 1970.
- Jacob, W. M. *The Clerical Profession in the Long Eighteenth Century, 1680-1840*. Oxford UP, 2007.
- Markley, Robert. "The economic context." *The Cambridge Companion to Pride and Prejudice*. Ed. Janet Todd. Cambridge UP, 2013. 79-96.
- Mingay, G. E. *English Landed Society in the Eighteenth Century*. Routledge and Kegan Paul, 1963.
- Myerly, Scott Hughes. *British Military Spectacle: From the Napoleonic Wars through the Crimea*. Harvard UP, 1996.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew: From Fox Hunting to Whist—The Facts of Daily Life in Nineteenth-Century England*. Simon and Schuster, 1993.
- Porter, Roy. *English Society in the Eighteenth Century*. Revised edition. Penguin, 1991.
- 坂田薫子「ハイペリーの階級闘争」(『ジェイン・オースティン研究の今——同時代のテキストも視野に入れて』、日本オースティン協会編、彩流社、2017年、69~87頁)
- 『脇役たちの言い分——ジェイン・オースティンの小説を読む』(音羽書房鶴見書店、2014年)
- Smith, Johanna M. "I Am a Gentleman's Daughter": A Marxist-Feminist Reading of *Pride and Prejudice*." *Approaches to Teaching Austen's Pride and Prejudice*. Ed. Marcia McClintock Folsom. MLA, 1993. 67-73.



- Spring, David. "Interpreters of Jane Austen's Social World: Literary Critics and Historians." *Jane Austen: New Perspectives*. Ed. Janet Todd. Holmes and Meier, 1983. 53-72.
- 田中英夫編『英米法辞典』（東京大学出版会、1991年）
- Virgin, Peter. *The Church in an Age of Negligence: Ecclesiastical Structure and Problems of Church Reform 1700-1840*. James Clarke, 1989.
- Weeks, Jeffrey. *Sex, Politics and Society: The Regulation of Sexuality since 1800*. 1981. Longman, 1989.
- Western, J. R. *The English Militia in the Eighteenth Century: The Story of a Political Issue 1660-1802*. 1965. Gregg Revivals, 1993.